

池田大作先生の生命論

董 武・王 偉英

生命の本質についての問題は、哲学と宗教の基本的問題でもある。生命は何処から来て、何処へ行くのか。この人生最大の課題は哲学と宗教の出発点であり、またその帰結でもある。哲学と宗教はこの問題に注目することで、人間の人生にとっての目的と意義について注目するようになり、それによって人類の「究極の関心事」を説明しようとしたのである。同様に、一人の宗教思想家として、池田大作先生のすべての思想体系の中で、最も人々の関心を引きつけるものが、氏の生命論である。これはただ単に氏のすべての思想展開の原点であるだけでなく、氏の思想体系の中で最も堅実な哲学理論の基礎となっている。言い換えれば、まさに池田先生の生命に対する深い思索は、氏の人間学と社会革命の理念と実践を裏付けている。したがって、池田先生の生命論を深く把握することは氏のすべての思想体系と実践の核心の所在を知ることとなるのである。

1. 宇宙は生命の海

生命の起源を探求するには、まず宇宙の根本的問題について遡らなくてはならない。この問題についてはビッグ・バン説や重複宇宙説などがある。池田先生は、どの説についても人類の認識能力には限界があることを認めている。ドップラー効果によれば、星雲間は驚くほどのスピードで互いに遙かな方向へ向かって離れており、地球から200億光年の彼方になると、人類の自然科学はその能力を発揮できなくなる。また地球からの距離が200億光年以内の宇宙は、物理学上では可視の宇宙であり、これより遠い、いわゆる「宇宙線」のその向こうは、人類の感知できない世界である。「そこから先は科学の範囲を越えて、純粹に哲学、つまり人間の思惟と想像の問題になります」⁽¹⁾。

宇宙の大きさは有限か、それとも無限か。宇宙はどのような起源を持つのか。宇宙の本質の問題に関しては、「結局は哲学、宗教に託されるべき性質のもの」⁽²⁾なのである。ここで、池田先生はこの科学的問題を哲学化、宗教化することで、人々が現実の物質的世界から瞬く間に宗教的主観の世界へと入り、そしてそこから生命の本質についての宗教的認識が、自由で闊達な合理的背景を得ることができるとされている。

仏法では、宇宙は「五百千万億那由他阿僧祇の三千大千世界」⁽³⁾であるとしている。「那由他」とは現在の数量概念では一十億に相当し、「阿僧祇」は10の51乗である。したがって、これは計算できない巨大な数字である。また仏法では、宇宙は無量大であり、無量無辺で、無始無終であるとみなしている。この無限大の宇宙において、生命は如何にして誕生したのか。池田先生は、「宇宙を有無という二つの概念のみでとらえようとすれば、そこにおける生命の発生は、無から有を生じたといわざるをえません」⁽⁴⁾と述べ、この点については仏法では否定する。なぜなら仏法では生命は有無の概念を超越していると理解するからである。仏法では、ある意味

Dong Wu (北京行政学院公共管理学部副主任・助教授／北京大学池田大作研究会会員)
Wang Weiying (北京華文学院助教授)

で、「地球を含む宇宙それ自体が、本来、生命的存在であり、“空”の状態にある生命を含んでいる。それが“有”として顕在化する条件が整ったとき、宇宙のどこにでも、生命体として発生する可能性がある」⁽⁵⁾と理解しているのである。池田先生は「生物を生み出す力が宇宙自体にあり、無生の物質にも生命が冥伏した形で内在している」⁽⁶⁾とし、また「大宇宙それ自体が一個の生命体である」⁽⁷⁾とみなしている。すなわち、地球を含む宇宙それ自体が本来、生命的存在であり、「空」の状態にある生命を含んでいる。「有」として現出できる条件を持った時に、宇宙のいかなる場所でも生命体として出現しうる可能性を持っているのである。したがって、池田先生は「宇宙自体が生命を誕生させる力を内包した“生命の海”である」⁽⁸⁾と述べている。

宇宙はこれまで一貫して何物も存在しない「真空」であるとみなされてきたが、じつはそれはたえず「物」を生み出す生命空間だったのである。この発見は20世紀の科学が証明した偉大な成果である。現代物理での真空は、「空」ではないが、その本質を現時点の言葉で言えるとするれば、我々の科学では事物を包含する基本的物質の存在形態である、ということである。アインシュタインは、物理空間は「たんなる広がりをもつだけの空虚ではなく、それ自体の性質が、その中に存在する物体に影響を与えたり、ある条件を整えば、物質を生み出す可能性をも含んでいる」⁽⁹⁾と分析している。このように、現代物理学の空間認識と池田先生の「空」の概念は深い共通性をもっている。また池田先生の「空」の生命起源の観点は現代科学の論証を得ているのである。

池田先生の「空」の宇宙観では、「空」は一種の生命創造の力であるだけでなく、生命そのものの一種の形態でもある。またそれは新たな生物や物質変化を生み出す原動力でもあり、宇宙に内在する一種の創造的力でもあり、神秘的な「無定体（物質的実体を持たない）」の真実の存在である。したがって、池田先生の宇宙観は、実際に「宇宙即生命、生命即宇宙」の大生命観なのである。この生命観は強い科学探究の精神を体現し、知的思惟の色彩に満ちており、「上帝造人（神が人間を創造する）」という創世神話と比して、科学的にも人々を納得させるものである。それ故この基礎の上に形成された池田先生の思想体系は強い信仰の力をも有することになるのである。

2. 生命は作者であり作品

池田先生は「生命の誕生という厳粛な事実を前に私どもは、科学、哲学、宗教のすべての英知を集め、その重要なテーマを探求していくべきである」⁽¹⁰⁾と言う。生命の起源については、一般に支持されているのは自然発生学説である。原始段階の生物化石の発見と簡単な有機物の人工合成によってこの学説は証明されている。

具体的には、最も早い生命形態は無機物の中から有機物が生み出され、タンパク質を形成し、その物質の新陳代謝によって生命体が誕生したのである。だが池田先生はこの種の生命起源の解釈は、ただ生命を物質現象としてとらえているだけであり、生命誕生の過程を探求する時、「私が問題にしたいのは『どのように』ではなく、『なぜ』無生の物質の世界に生命が誕生することができたか、という点です。それは、物質現象の側面のみの問題ではなく、もっと深く、生命の本質にまで掘り下げてみなければならないテーマになる」⁽¹¹⁾と述べている。つまり、宗教哲学は科学よりもさらに一歩進んで、生命起源誕生の過程を明らかにすることで満足するのではなく、さらに生命起源の原因についても明らかにしなければならないと考えている、と言えよう。地球上に生命がどのようにして誕生したかではなく、この地球上に生命がなぜ誕生したか、という問題なのである。

池田先生は、論理的に「誕生した当初はたぶん無生であった地球に生物が発生したということは、無生の地球それ自体のなかに、すでに生命への方向性をはらんでいたといえるのではないのでしょうか」⁽¹²⁾と述べている。生命は決して受動的な存在ではなく、能動的な存在である。生命のこのような能動性は、「激発性」とも言えるが、いったいどこから来たのであろうか。池田先生は「私は、無生のなかに生を内包し、その生が自己を顕現していった過程こそ、まさに生命の起源の意味するところだと思うのです」⁽¹³⁾と言う。まさしくこの点にこそ、池田先生が生命の起源を一種の「創造」された「新産物」であるとする見解に同意しない理由がある。なぜなら生命が無から創造されたのであるとすれば、必ず創造者がいなければならない。そうすると自然に一個の創造「神」の存在を認めることになるからである。

池田先生は生命起源の正確な解釈として「発現」説を採っている。いわゆる「発現」とは、元来すでに存在していた物が顕在化することである。このことについて、トインビーも「変化が現われるのはすべて実際には錯覚にすぎなくなってしまう。なぜなら、現在存在するものも、これから存在しようとしているものも、すべて初めから存在していたことになってしまうからです。すべての出来事は、もともと潜在していた実在の要素が徐々に顕在化したのだらうということになってしまうわけです」⁽¹⁴⁾と述べている。この見解に従えば、世界上には無から生じたといういかなるものも根本的に存在せず、現在存在し将来現出するものは、もともとあった物質が表面化したものであるにすぎない。それはまた、事物の存在はすべて「潜在」から「顕在」へという過程があり、それゆえに有の中に化有があるのであって、無の中から生を有するのではない。池田先生は「生命は地球の誕生から現在まで、みずからの顕現と出現を継続的に持ち続けており、みずからを個別的に発展させる方向へと向かわせていく」性質を有することを肯定的にとらえている。このような個別化する生命に能動性があることは、「生命エネルギーの力」と言ってもよく、「すでに無生の地球それ自体に内在していたはずです」⁽¹⁵⁾と。この意味からいえば、「生命はそれ自体作者であり作品である」⁽¹⁶⁾といえよう。

ここで、われわれは池田先生が繰り返し言及している「空」の概念についてより進んだ理解が必要であろう。なぜなら、この「空」の概念を理解できてはじめて生命という存在の性質について理解できるからである。池田先生はいわゆる「空」とは言葉で表現できない存在状態であり、現象として現われたものでもない。しかしそれは一種の存在であり、視覚できるものではないために、「無」と同様に見なされていると言うこともできる。しかし、それは縁に触れることで、肉眼で見ることのできる形態として出現するので、このような存在を「無」と呼ぶことはできない。したがってこのような状態を「有」と「無」だけで表現することはできないのである。いわゆる「空」とは、「有無」を超越した実在であり、「真有」でも「虚無」でもなく、それは無量の潜在力を含んでおり、無限の創造力を持つ「生命空間」である。これは現代物理学の「統一場」の概念と近似している。池田先生は仏法の「空」と言う概念を用いて宇宙の起源と生命の誕生を解釈しており、宇宙観と生命論を合一させ、宇宙、地球、人間の三者に同一性を具有させる。氏は現在の生命についての概念は狭隘で、生命を生物学上の存在とのみ見なしているが、これでは生命を有形の物とのみ認識させ、本質的な意義の探求をおろそかにしてしまう。仏法の「大生命」観は、生物学上の生命を一種の存在とみるだけでなく、生命を生み出す力そのものの一種の存在であるとみなしており、前者が顕現形態であり、後者が潜伏形態であり、両者はともに生命そのものが備えている異なる表現形態である。この意味から人間や地球や宇宙が生命であるばかりでなく、そのすべてが同一性を備えたものを必然的に持つ共同性を有している。したがって、人間、地球、宇宙とはその形態には違いがあるが、本質的に

は一体であり、宇宙即人間、人間即宇宙である。この思想は池田先生が人類思想の歴史上の独創的な（インド思想の「汝即梵」、中国思想の「我心即宇宙」）などの伝統思想を、新たに理論的に発展させたものである。

以上の考察を通し、我々はまず池田先生の大生命観に含まれる徹底した科学的理念を理解することができる。氏は仏法の「空」の概念を現代物理学の「場の空間」理論に応用して両者を結びつけた。これは自身の宗教思想に基づく確固たる立脚点から出発している。これはまた伝統的宗教思想が科学の発達した現代に対して与えた一つの発展の道程である。

第2には池田先生が示した「空」の概念を理論的支柱とする生命起源説は、有神論と無神論を画する画期的な理論であろう。池田先生の生命観には、伝統的観点が備えていない革命的思想をもっている。氏は人間が一個の生命体としてもともと有している主体性、能動性、そしてそこから生み出される創造的潜在能力を強調しているが、そこに氏の人間学、すなわち人間革命の理論的根拠を見出すことができるのである。

3. 生死不二

池田先生の生命論では、「空」の概念を用いて宇宙と人間の同一性の「発見」に成功しただけでなく、さらに「空」の概念によって「死」を超越することができた。そしてこの人類にとって最も重要な問題を理論的に昇華させ、氏の人間学において最も核心的で革新的な内容を展開しているのである。

「たとえ千年の鉄の檻にありても、終には一つの土饅頭（墓）を要す」とあるように古来、死は深刻かつ甚深な人々の心の奥底を圧迫する本質的恐怖であった。科学がいかに進歩しようとも、社会がいかに発展しようとも、「生あればすなわち死があり、人は総じて死ななければならない」のである。この問題はいかなる人間であっても解決できないが、人類の最も根本的な「臨終に関心を持つ」宗教にとっては必ず解決すべき難題であり続けてきた。では、池田先生はいかにしてこの問題を解決したのであろうか。

池田先生は『法華経』を中心とする立場から、日蓮以来の生命論の理論的成果を吸収し、「空」の概念を極限まで発展させ、死に対して独創的で深遠な考察をおこなっている。池田先生は「ふつう、生命は『生で始まり』『死で終わる』と考えられている。しかし日蓮大聖人は、生命とは三世永遠にわたるものであり、『生』も『死』も、生命にもともとそなわった『本有』の理であると説かれている」⁽¹⁷⁾ と言う。したがって、池田先生は次のように主張する。「生命というものは『時間』『空間』をつらぬいている無始無終の實在せるものであるといえる。」⁽¹⁸⁾ さらにまた、「もともと、生死をこえた永遠にわたる生命の實在がある。全世界を焼尽する大火にも焼けず、水が災いをして朽ちらせることもできない。剣にも切られるものではなく、弓をもっても射られることもできない。きわめて小さい芥子粒の微塵にいれても、芥子粒が広がることはなく、また廣大無辺なる宇宙のなかに遍満しても、宇宙自体が広すぎるということはない。つまり一念の生命というものは、生死、生滅、大小、広狭の相対性をこえた不変の實在である」⁽¹⁹⁾ と述べる。すなわち、「生命の流転というものは永遠である。これが仏法の大原則」⁽²⁰⁾ なのである。

この大原則をさらによりよく示すために、池田先生は次のような例を挙げている。「これは、一日にたとえてみるならば、朝日が昇り目をさます。『生』である。その『生』の延長として一日の行動が始まる。一日の活動を終えて、疲れを癒すために家路につく。夜、あすの『生』のために休息の床につく。これすなわち一日の『死』である。これと同じように、一生の価値あ

る活動を終え、新たな活力ある生命力をえるために、『死』という方便の姿を示すというのです⁽²¹⁾と。これが『法華経』で説くところの「方便現涅槃」である。したがって、大乘仏教の主張する「生死不二」とは、生と死は時間と空間における現象であり、生命とはこの時間と空間を超越した存在の、2種類の異なる顕現形態なのである。それぞれの生命体はすべて生命が顕現した状態である。いわゆる「死」とは生命が「冥伏」した状態であり、「冥伏」は無に帰結するのではない。これについて、池田先生はさらに解釈を加えて、「空」という概念は、目には見えないが確実に存在し、有と無のどちらか一方を用いて決定できる概念でもない。これとは反対に、現実の様々な状態で出現するそれぞれの形態は、「仮」と呼ばれる。心身の統一した生は「仮」の状態であり、その中に「空」を含んでいる。死後の生命は、「空」となって存在し、同時にその中に「仮」の傾向性、方向性を含んでいる。一旦条件がそろえば、生命の存在形式は「空」から「仮」へと変わり、肉眼で見ることのできる現実の物体となって「再生」するのである。

「空」と「仮」を貫く生命の本質を「中」と呼び、この生命の本質は永遠に「空」と「仮」の中を無限に流転し続け、ある時は顕現し、またある時は冥伏していく⁽²²⁾。さらにまた、生命は「成住壞空」という生命発展のリズムのなかで生死流転し、永遠にとどまらない。人も、星も、宇宙そのものも同様である。仏法においては、このような生命本源の法理を明確に示している。それは「有形」を通して「無形」を理解し、「無形」を通して永遠を理解するのである。

生命が生死流転の輪廻の中にあるのであれば、自然に人間の運命の問題が発生してくる。したがって、宗教の因果応報という運命説も同様に導き出される。仏法からみて、運命の法則とはすなわち因果応報である。一人一人が一生で成すところの全てが自己の「業」となり、来世に転生するための「因」となる。そしてすべての「業」には必ず応報があり、いわゆる「善には善報、悪には悪報」がある。今世に蒔かれた因は、必然的に来世にあっては果となるのであり、「瓜を蒔けば瓜を得、豆を蒔けば豆を得る」ように、いかなる因がいかなる果を得るのか、応報にはいささかのくすもない。一人一人がみずから蒔いた因は、みずからその果を食するのである。われわれは、現在、科学的証明が得られないため、永遠の生命の問題に関しては、依然として哲学宗教の仮説を承認せざるをえない。これについて、池田先生は、「たしかに、人間の知的能力には限界があり、その範囲を越えた宇宙の究極にあるものや、人間の生命の本質に関する定義は、すべて『仮説』にならざるをえないと思います⁽²³⁾と述べる。しかし、この種の宗教的仮説は、また充分重要であり必要でもある。なぜなら、科学的仮説が追求するのは真偽の問題であり、宗教の仮説が求めるのは人々の天性を改善するために必要な価値なのである。「人間存在がなるほど現世の生だけのものだとすれば、死後の運命などということは問題ではなくなってしまう。しかし、こうした死後についてのとらえ方の相違は、この世でのわれわれ人間の生き方を大きく左右することが考えられるのである⁽²⁴⁾。

この意味から、池田先生は仏教の主張する生命輪廻と永遠存在の仮説について次のように主張する。「仏教が主張する、輪廻しながら生命が永続していくという『仮説』は、人間が生まれながらにして、個人によって種々に異なる宿業（カルマ）をもっているという事実を説明するうえで、有効性をもっている⁽²⁵⁾と。そしてこの事実は、「人間に、自分が人間以外の超絶者によって支配されているのではなく、すべてについて自分自身が責任をもっていることを自覚させ、本源的な主体性がここから打ち立てられることを可能にするということができましよう⁽²⁶⁾と。

まさしくこの意味において、池田先生は仏法の因果応報を人間革命の要素とみなし、ここに

「人間の本源的な次元での責任性・主体性を確立するカギを秘めている」⁽²⁷⁾と述べている。また「しかし、そうでなければ、刹那主義、快樂主義に陥って、なんの進歩もなくなってしまうでしょう。時代の進歩もなくなってしまう。また人生、あまりにもふざけ半分になってしまう。それでは、自己を律すること、人々への善意、社会への貢献などというものは、忘れら去られてしまうでしょう」⁽²⁸⁾とも述べている。これにより生命の永遠性とそこから生み出される運命の因果律が最終的には仮説の域を出なくとも、我々人類社会の発展にとって必要かつ素晴らしい仮説なのである。このような仮説の存在は合理性を有し、まさに我々が人間の真、善、美を追究するのに必要な前提となる。

「人の一生での行為は、倫理上の結果を必ずもたらし、この結果は十分に重要であり、自己に対してだけでなく、全人類、全宇宙にとっても重要なのである」。そしてまさにこの因縁の故に、人生は意義をもち、宗教も意義をもつのである。

以上みてきたように、池田先生は生命論において、伝統的な仏教思想の中から最も意義を持つものを掘り起こし、そして、宗教の生死観から出発して、より価値と意義を持つテーマ、すなわち人々がどのように生きていくのか、を導き出したのである。ここから大乘仏教の『法華経』と小乗仏教は明確に区別されることがわかる。すなわち仏法とは人心なのである。池田先生は、人間革命の可能性と必要性を理論的に明らかにし、自身の宗教的実践のために確固とした哲学的基盤を確立したのである。

(注)

- (1) トインビー・池田大作『二十一世紀への対話 下』(文芸春秋、1975年) 236頁。
- (2) 前掲書、242頁。
- (3) 池田大作『「仏法と宇宙」を語る』第1巻(潮出版社、1984年) 182頁。
- (4) 注(1) 書 215頁。
- (5) 注(1) 書 216頁。
- (6) 注(1) 書 247頁。
- (7) 注(1) 書 247頁。
- (8) 注(1) 書 216頁。
- (9) 注(1) 書 255頁。
- (10) 池田大作『第三の虹の橋』(毎日新聞社、1987年) 229-230頁。
- (11) 注(1) 書 212頁。
- (12) 注(1) 書 212頁。
- (13) 注(1) 書 212頁。
- (14) 注(1) 書 213頁。
- (15) 注(1) 書 214頁。
- (16) 注(1) 書 213頁。
- (17) 池田大作『「仏法と宇宙」を語る』第2巻(潮出版社、1984年) 245頁。
- (18) 注(3) 書 71頁。
- (19) 注(3) 書 70、71頁。
- (20) 注(17) 書 86頁。
- (21) 前掲書 86頁。
- (22) 注(1) 書 232頁。
- (23) 注(1) 書 223頁。

- (24) 注(1) 書 360頁。
- (25) 注(1) 書 224頁。
- (26) 注(1) 書 224頁。
- (27) 注(1) 書 367頁。
- (28) 注(17) 書 80頁。